

## 「ゆとり教育」時代の高校教科書語彙を考える

### - 1980年代と2000年代の高校英語教科書語彙の比較分析からの考察 -

The Impact of *Yutori Kyouiku*: A Comparative Study of 1988 and 2006 High School Textbook Vocabulary

中條清美・西垣知佳子・長谷川修治・内山将夫

#### Abstract

High school English textbooks in Japan are written in accordance with the Course of Study guidelines provided by the Ministry of Education, Science, and Culture and these guidelines are revised about every ten years. In 1978, there was a concern that students were under too much academic pressure, and the guidelines were revised to incrementally reduce the content level of several subject areas taught in high schools across the country. Critics of this *yutori kyouiku* reform complain that the reduction in subject content has caused a drastic decline in students' scholastic ability. In order to measure what impact there might be with regard to English education, we examined the pre-reform vocabulary of high school textbooks (used nationwide in 1988) and compared the vocabulary size, vocabulary level, vocabulary range, keywords, and the efficacy of the vocabulary to post-reform textbooks (used nationwide in 2006). It was found that the number of types and tokens decreased drastically from 1988 to 2006; the vocabulary level increased slightly; various keywords appeared reflecting the recent developments in science and technology; and that the overall high school text coverage for practical activities declined. Using vocabulary knowledge as a dashboard indicator of proficiency, the implication of this study is that in order to support language acquisition, the idea of content reduction in the national curriculum might be revisited, or that it may be beneficial to revise university curricula and teaching methodologies for college-bound students who are using these types of high school textbooks.

#### 1. はじめに

現在,改訂準備が進む学習指導要領であるが,中央教育審議会では「ゆとり教育」から「確かな学力の向上」という「脱・ゆとり教育」という基本方針の転換を示した(読売新聞 8/17/2007)。「ゆとり教育」は,1970年代以降,学習指導要領改訂のひとつの柱となってきたが,学力低下の不安が高まる中(佐藤,2001;苅谷,2003),その方針転換が示された。学習指導要領の改訂を控え,我が国の英語教育の基盤となる英語教科書を歴史的な流れの中で再検討することは,英語教育にとって意義深いと考える。

英語教科書の歴史的調査には,たとえば,明治から大正,昭和,平成にわたり,各時代を代表する教科書を質的・量的に分析した小篠・江利川(2004)があるが,最も顕著な変化は「異語数の減少」であったという。戦後,昭和26年(1951)発表

から平成10・11年(1998・1999)告示までの中学校・高等学校(以下,中・高)学習指導要領に示された新語数合計の上限は,昭和26年の6,800語から平成10・11年の2,700語まで,学習指導要領が約10年ごとに改訂されるたびに徐々に減少の一途をたどり(伊村,2003:117),教科書で学習できる異語数の減少が長期的に起こってきた。<sup>1</sup>

「ゆとりカリキュラム」が登場したのは,昭和52・53年(1977・1978)告示の学習指導要領である。それまでの「詰め込み教育」に対する反省から教科の学習内容が削減された。その後,平成元年(1989)告示の改訂を経て,さらに学習内容が削減され,平成10・11年告示の学習指導要領では「ゆとり教育」の総括として,学校週5日制が導入され,時間数の削減に伴い,小・中学校では学習内容が約3割削減された。現行の中・高英語教科書はこの平成10・11年告示の学習指導要領に基づく。したがって,「ゆとり」の集大成である平成10・11年告示の学習指導要領に基づく2000年代の英語教科書の語彙と,「ゆとり」路線を歩み始めた昭和52・53年告示のものに基づく1980年代の英語教科書の語彙を比較すれば,「ゆとり教育」によってもたらされた教科書語彙の変化が観察できると考える。

文部(科学)省の検定教科書に限定した場合,現行の中学校用は7シリーズと数が少なく,使用される語彙に関する調査も網羅的である。しかし,現行の高等学校用は30シリーズ以上あり,調査範囲が膨大なことから,網羅的調査はあまり行われていない。<sup>2</sup> 上述の小篠・江利川(2004)においても,調査した教科書は各時代を代表する中・高英語教科書各1シリーズであった。英語教科書の変化を検証する上で,可能であれば調査対象を教科書全般に広げ,どのような変化が観察されるかを調査することは重要であり,興味深いところである。

本研究では,このような点を考慮して,1980年代に使用された高校用英語教科書のうち学習の中心と考えられる英語・もしくは・・Bからなる教科書40シリーズ,計100冊,同様に2000年代の現在使用されている教科書(BはReadingと改称)35シリーズ,計95冊を収集して教科書コーパスを作成,分析し,両者を多様な角度から比較することによって,我が国の高等学校用英語教科書に使用される語彙の実態を明らかにすることを目的として行われた。<sup>3</sup>

## 2. 研究の方法

## 2.1 言語資料

### 高等学校英語教科書

- 1) 1988年度に使用された高校教科書：文部省(1987)によると，1988年度に使用された教科書は，「英語」44冊，「英語」40冊，「英語 B」26冊の計110冊であった。本研究では，採択数等を考慮してそのうち100冊を調査対象とした。同一の出版社から発行された同名の教科書は同一のシリーズとしてまとめ，計40シリーズの教科書を対象とした。出典を付録1に示した。<sup>4</sup>
- 2) 2006年度に使用された高校教科書：2006年度には，「英語」34冊，「英語」36冊，「リーディング」25冊の計95冊の教科書が出版された(文部科学省，2006)。本研究では95冊，計35シリーズを調査対象とし，出典を付録2に示した。<sup>5</sup>
- 3) 両年度に共通の高校教科書：上記1)と2)のうち，1988年と2006年の両年度を通じて継続されているものは8シリーズであった。高校教科書には，明記されていないものの，現実的には，基礎，中級，上級という学習者向けレベルがある。そこで，本研究では両年度の教科書語彙の変化を具体的に観察するため，「基礎」：英語・から成り，B(Reading)のないもの(*Vista, English Now*)，「中級」：英語・・B(Reading)から成るが比較的語彙数の少ないもの(*Daily*)，「上級」：英語・・B(Reading)から成り，語彙数の多いもの(*Sunshine, Mainstream, Milestone, Crown, Unicorn*)という3レベルに8シリーズを分けた。

### 比較用参考資料

- 1) British National Corpus (BNC) リスト：教科書語彙の語彙レベルの計測と特徴語抽出のため，比較の基準となる大きな汎用語彙表として，イギリス英語の成人のコーパスであるBNCを用いた。頻度100以上に該当する13,994語の「BNCリスト」(Chujo, 2004)を使用した。
- 2) 英語母語話者の語彙習得学年資料：教科書語彙の学年レベルを見るため，米国の4~16年生が基本的な語の意味を理解する学年を40,400項目にわたって調査したDale and O'Rourke (1981)の*The Living Word Vocabulary*を用いた。この資料には米国の半数以上の生徒が当該単語の意味を理解できる学年が示されている。ただし，最低学年レベルは4年生になるため，本研究では4年生以下を1年から4年の学年に細分する資料としてHarris and Jacobson (1972)の*Basic Elementary Reading Vocabulary*sを使用した。<sup>6</sup>

- 3) 中学校教科書：1人の学習者が学ぶ英語教科書語彙の実用性を調査するには，中学校教科書から学習される語彙も含める必要がある。そこで，1988年度と2006年度の高校教科書と同時代に使用された1986年度と2002年度の中学校教科書のうち，採択率第1位を占めた(出版労連，1987：時事通信社，2005) *New Horizon 1, 2, 3* (太田他，1986；笠島他，2002)を収集した。1986年度は異語数834語，延べ語数7,725語，2002年度は異語数728語，延べ語数6,148語であった。<sup>7</sup>
- 4) 音声言語・文字言語各7種の言語資料：教科書語彙の実用性を調査するため，日本人英語学習者が高校卒業後に大学に入学し，グローバル化社会の中で生きるために必要とされる英語のサンプルとして，表1に示した5つのジャンルを設定し，下位区分として音声・文字各7種の言語活動の言語資料を収集した。5つのジャンルは，(1)英語コミュニケーション能力試験( TOEIC, TOEFL )，(2)大学留学(チュートリアル，大学入学案内)，(3)情報収集(英語ニュース，英文雑誌・英字新聞)，(4)日常生活(サバイバル英語，生活案内)，(5)趣味・教養(映画，小説)である。(1)については，国際ビジネスマンとしての基本的英語コミュニケーション能力を測る TOEIC と，英語圏の大学・大学院留学に必要な英語コミュニケーション能力を測る TOEFL の2種を使用し，(3)についても，日本人英語学習者が到達目標にすると考えられるもの( PBS, *TIME* )と，初心者向けの教育的配慮のあるもの( VOA, *News for You* )という観点から2種ずつとした。
- 信頼性のある計測結果を得るため( Chujō and Utiyama, 2005 )，言語活動ごとに1,500語×5個の資料を無作為に抽出した。ただし，TOEIC と TOEFL は試験問題という性質上，テスト全体を対象とし，2回分の試験問題を使用した。各言語資料の平均延べ語数と平均異語数を表1に示した。出典は付録3に示した。<sup>8</sup>

表1 音声言語活動・文字言語活動各7種の言語資料

ジャンル	音声言語活動	延べ語数	異語数	文字言語活動	延べ語数	異語数
英語コミュニケーション能力試験	TOEIC (リスニング・セクション)	3,953	894	TOEIC (リーディング・セクション)	3,483	1,010
	TOEFL (リスニング・セクション)	3,054	678	TOEFL (リーディング・セクション)	4,399	1,152
大学留学	チュートリアル	1,500	319	大学入学案内	1,500	426
情報収集	PBS (TVニュース)	1,500	411	<i>TIME</i> (英文雑誌)	1,500	584
	VOA (ラジオ・レポート)	1,500	416	<i>News for You</i> (ESL英字新聞)	1,500	460
日常生活	サバイバル英語(生活英語)	1,500	261	生活案内	1,500	465
趣味・教養	映画(Titanic)	1,500	439	小説( <i>Harry Potter</i> )	1,500	458

## 2.2 各言語資料の語彙表の作成

高校教科書および中学教科書の教科書本文を、入力、校正して教科書コーパスを構築した。続いて、単語の基底形(base form)に基づく語彙表を作成した。なお、固有名詞や数字等は特定のテキストに集中して出現することが多く(Nation, 2001:19-20)、語彙表の比較・観察の際には障害となるため除去されることが多い。本研究において、語彙表の作成に際してはこれらの語を手取りで取り除いた。比較用参考資料も同様の基準に基づいてそれぞれの語彙表を作成した。<sup>9</sup>

## 2.3 語彙表の比較調査方法

1980年代と2000年代の教科書語彙を、次の5項目について調査した。

- (1) 語彙数の変化：異語数、延べ語数、1語あたりの反復回数、そして、各シリーズに1回だけ出現する「頻度1」の異語数の比率を調査した。
- (2) 語彙レベルの変化：英語母語話者の語彙習得学年に基づく学年レベルと、BNCリストを基準尺度にした語彙レベル、という2つの観点から調査した。
- (3) レンジの変化：ある語が何シリーズの教科書に出現したかを示す「レンジ」の値を調査して、語彙の分布傾向を観察した。
- (4) 特徴語の変化：単語散布図を利用して、一般分野の語彙と比較して高校教科書に相対的に多く出現した特徴語を調査した。
- (5) 実用性の変化：音声・文字言語活動各7種の使用語彙に対して、教科書語彙の占める割合である「カバー率」を計算して実用性を推定した。<sup>10</sup>

## 3. 結果と考察

### 3.1 語彙数の変化

1988年度の教科書40シリーズ100冊に出現した語彙と2006年度の教科書35シリーズ95冊の語彙を比較した結果を表2に示した。1988年度教科書の全シリーズの総計は延べ語数993,879語、異語数10,595語、2006年度は延べ語数607,407語、異語数9,904語であった。

通常、学習者は同一シリーズを、あるいは、B(Reading)と継続して学習するので、続いて、シリーズごとに延べ語数と異語数を求めた。その結果、1シリーズの平均延べ語数は1988年度の24,847語から2006年度は16,950

語へと31.8%減少,平均異語数は2,028語から1,775語へ12.5%減少し,各教科書シリーズのインプットの分量は大幅な減少を示した。この要因としては,1980年代には12単位あったA, Bの合計単位数が,2000年代には11単位に減少したことが影響していると思われる。

次に,延べ語数を異語数で除した「1語あたりの反復回数」は,1988年度の11.4回から2006年度は8.7回に減少した。これを裏付けるように,各シリーズを通して1回だけ出現する頻度1の異語の比率は,1988年度の38.6%から,2006年度は42.6%に増加した。語彙の学習における繰り返しの重要性(O'Dell, 1997; Nation, 2001)を考慮すると,2000年代の英語教科書ではその定着度が憂慮される。

表2 1988年度と2006年度の高等学校英語教科書の語数比較

	1988	2006
シリーズ数と冊数	40シリーズ100冊	35シリーズ95冊
全シリーズでの延べ語数	993,879語	607,407語
全シリーズでの異語数	10,595語	9,904語
1シリーズの平均延べ語数(最小~最大)	24,847語(5,584~50,435語)	16,950語(3,526~34,751語)
1シリーズの平均異語数(最小~最大)	2,028語(859~3,700語)	1,775語(696~3,161語)
1シリーズの1語あたりの反復回数(最小~最大)	11.4回(6.5~20.1回)	8.7回(4.7~13.4回)
1シリーズの頻度1の語数と割合(最小~最大)	773語(384~1,547語) 38.6%(24.8~45.3%)	738語(330~1,399語) 42.6%(34.6~52.5%)

### 3.2 語彙レベルの変化

各教科書の語彙レベルを推定する方法として,本研究では,英語母語話者の語彙習得学年資料を利用する方法と,BNCリストという大規模な基準語彙表を用いる方法という2つの手法を用いて調査した。

第1の方法は,各教科書シリーズに出現したすべての異語に対し,資料に照らして,学年レベル(米国の1年生~16年生)を割り当て,総異語数で除して平均学年を算定するものである。計算例としては,たとえば,Population growth makes the global economy expand.という文の場合,各語に, population: 6年, growth: 4年, make: 1年, the: 1年, global: 6年, economy: 8年, expand: 6年と学年を付け,次に $(6+4+1+1+6+8+6) \div 7 = 4.3$ 年のように学年合計を異語数で除して平均学年を求めることができる。なお,資料に未収録の語は17年生として計算した。この方

法で、たとえば、2000年代の高校教科書 *Unicorn* の英語 I の学年レベルを求めると 3.4 年生となる。

第2の方法は、イギリス英語の成人のコーパスである BNC リストを基準尺度とし、その頻度順語彙リストの上位何語で各教科書の延べ語数を 95% 以上カバーできるかを算定する手法である。「95%」という基準は、Laufer (1997) 等のように「英文の内容理解には、当該英文の 95% 以上にあたる語彙数が最低限必要であろう」とする研究者が語彙研究の分野に多いことを参考にした。この第2の方法を用いると、たとえば、上記の 2000 年代の高校教科書 *Unicorn* の英語 I には異語数 1,064 語、延べ語数 6,439 語が使用されており、その延べ語数の 95% は 6,117 語にあたる。この 6,117 語をカバーするには BNC 頻度順語彙リストの 1 位 ~ 2,920 位の語彙が必要であるため、BNC 語彙レベルは 2,920 語となる。このように本研究では、各教科書シリーズの語彙の延べ語数の 95% をカバーできる位置にある BNC 頻度順語彙リストの順位を、当該教科書シリーズの「BNC 語彙レベル」と定義した。

以上の2つの方法を用いて語彙レベルを算定した結果を表3に示した。第1の方法によると、1988年度に使用された教科書シリーズの学年レベルは 3.1 ~ 5.3 年間に分布し、平均学年レベルは 4.0 年であった。2006年度の教科書は 2.8 年 ~ 5.3 年に分布し、平均学年レベルは 4.1 年であり、1988年度よりわずかながら上昇している。参考までに、この指標を用いると、2002年度の中学教科書 *New Horizon* シリーズは 2.6 年、雑誌 *TIME* は 6.0 年であった。この結果を表3の高校教科書語彙の平均学年レベルと照らし合せると、高校教科書は中学教科書に続くレベルとして適切であり、*TIME* は学年レベルの一番高い教科書シリーズの語彙を学んでも難しそうだという、言語資料間の相対的な学年レベルの位置付けを見ることができる。

表3 1988年度と2006年度の高等学校英語教科書の語彙レベル比較

	1988	2006
1シリーズの平均学年レベル(最小~最大)	4.0年(3.1~5.3年)	4.1年(2.8~5.3年)
1シリーズの平均BNC語彙レベル(最小~最大)	3,011語(2,094~4,077語)	3,542語(2,515~4,603語)

一方、第2の方法である BNC に基づく語彙レベルで見ると、1988年度教科書シリーズは 2,094 語 ~ 4,077 語の間に分布し、平均 BNC 語彙レベルは 3,011 語であっ

た。一方、2006年度は2,515語～4,603語に分布し、平均BNC語彙レベルは3,542語となり、全体的に語彙レベルが上昇していた。2006年度は1988年度よりも頻度順位が低く、難易度が高いと考えられる語彙(たとえば *genetically*, *windmill*, *wheelchair*, *ozone*, *coral* など)が採用されていることが推察できる。参考までに、上記で用いた中学教科書 *New Horizon* シリーズの語彙レベルをBNC語彙レベルで算定すると1,843語であり、*TIME* は10,704語であった。表3の高校教科書語彙の平均BNC語彙レベルに照らしてみると、中学教科書語彙に続いて高校教科書語彙は段階的に妥当なレベルに位置しているように見える。

以上、米国の学年レベルに基づく第1の方法と、イギリス英語の成人のコーパスであるBNC頻度順語彙リストに基づく第2の方法という異なる観点から見た結果、1988年度と2006年度の教科書語彙レベルは、2006年度教科書の方が1988年度教科書よりも、難易度が相対的に上がっていたと判断できる。この傾向は学年レベルの調査結果よりもBNC語彙レベルの調査結果において顕著であった。

### 3.3 レンジの変化

本節では高校教科書語彙の分布の傾向を観察するため、「当該語が全シリーズのうち何シリーズの教科書に出現したか」を示す「レンジ」の値を調査した。表4に本研究で収集した1988年度の全40シリーズの教科書に出現した語彙10,595語、および2006年度の全35シリーズの9,904語のレンジの分布を示した。

レンジの第1段を見ると、1988年度の「レンジ40」すなわち1988年度の全シリーズに出現した語は266語(全異語数の2.5%)、2006年度の「レンジ35」すなわち2006年度の全シリーズに出現した語は169語(1.7%)であった。また、上位10段のレンジを見ると、1988年度はレンジ40-31に分布する累計異語数は781語(全異語数の7.4%)、2006年度でレンジ35-26に分布する累計異語数は665語(全異語数の6.7%)であり、1988年度は2006年度よりも重複する語が多い。これらのことから、どちらかというとなら1988年度の教科書はシリーズを越えて同じ単語が使われている傾向が強いと思われる。一方、レンジの最下段を見ると、1シリーズの教科書シリーズのみに出現したことを示す「レンジ1」は、1988年度は4,035語(全異語数の38.1%)、そして2006年度は教科書シリーズ数が少ないにも関わらず4,118語(41.6%)と1988年度より多い。

表4 1988年度と2006年度の高等学校英語教科書語彙のレンジ比較

1988					2006				
レンジ	異語数	%	累計異語数	%	レンジ	異語数	%	累計異語数	%
40	266	2.5%	266	2.5%	35	169	1.7%	169	1.7%
39	87	0.8%	353	3.3%	34	73	0.7%	242	2.4%
38	68	0.6%	421	4.0%	33	47	0.5%	289	2.9%
37	55	0.5%	476	4.5%	32	47	0.5%	336	3.4%
36	58	0.5%	534	5.0%	31	55	0.6%	391	3.9%
35	56	0.5%	590	5.6%	30	58	0.6%	449	4.5%
34	48	0.5%	638	6.0%	29	51	0.5%	500	5.0%
33	50	0.5%	688	6.5%	28	50	0.5%	550	5.6%
32	44	0.4%	732	6.9%	27	67	0.7%	617	6.2%
31	49	0.5%	781	7.4%	26	48	0.5%	665	6.7%
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
10	155	1.5%	2,577	24.3%	10	156	1.6%	2,075	21.0%
9	183	1.7%	2,760	26.1%	9	166	1.7%	2,249	22.7%
8	248	2.3%	3,008	28.4%	8	191	1.9%	2,440	24.6%
7	248	2.3%	3,256	30.7%	7	246	2.5%	2,686	27.1%
6	282	2.7%	3,538	33.4%	6	288	2.9%	2,974	30.0%
5	427	4.0%	3,965	37.4%	5	344	3.5%	3,318	33.5%
4	480	4.5%	4,445	42.0%	4	482	4.9%	3,800	38.4%
3	761	7.2%	5,206	49.1%	3	672	6.8%	4,472	45.2%
2	1,354	12.8%	6,560	61.9%	2	1,314	13.3%	5,786	58.4%
1	4,035	38.1%	10,595	100%	1	4,118	41.6%	9,904	100%

表5 出現シリーズ数による1988年度と2006年度の高等学校英語教科書語彙比較

出現シリーズ数	1988	2006
	異語数% (合計異語数)	異語数% (合計異語数)
2/3以上	9.4% (1,000語)	7.9% (779語)
1/3以上, 2/3未満	9.6% (1,012語)	10.1% (1,005語)
1/3未満	81.0% (8,583語)	82.0% (8,120語)
計	100% (10,595語)	100% (9,904語)

これらのレンジの比較において、1988年度と2006年度ではシリーズ数が異なっている。そこで表5では、教科書シリーズ数の合計を3分割し、2/3以上、2/3未満、1/3以上、1/3未満のシリーズの各区分に出現した異語数を集計した。その結果、2/3以上のシリーズに出現した語の比率は、1988年度は9.4%で2006年度の7.9%より高く、一方1/3未満のシリーズに出現した語の比率は2006年度の方が少し高いという前述と同様の傾向が確認できた。ここで取り上げたシリーズは各年代のほぼ網羅的なシリーズであるので、比較において数量的な差がある場合には統計的な検定をするまでもなく、1988年度の教科書の方が明らかに共通した単語が多く使

われていたと判断された。次節では、このような傾向が具体的に表れている事例を見ていきたい。

### 3.4 特徴語の変化

時代による特徴語の変化は、同じシリーズの教科書内での特徴語の変化に現れると考えられる。そこで、1988年度と2006年度に共通して継続されている8シリーズ(基礎: *Vista, English Now*, 中級: *Daily*, 上級: *Sunshine, Mainstream, Milestone, Crown, Unicorn*)の各教科書シリーズに顕著に出現した特徴語を単語散布図(Utiyama and Chujo, 2007)を利用して抽出した。図1に2006年度の *Vista* シリーズの単語散布図の例を示した。この単語散布図では横軸が一般分野のBNCにおける出現頻度と割合を表し、縦軸が各教科書シリーズにおける単語の出現頻度と割合を表す。散布図上の1つの点が単語1語を表し、各語は単語数によって各軸を3等分した9領域のいずれかに位置する。図1の楕円で示す左上の領域に、BNCでの出現頻度が低く、各教科書シリーズでの出現頻度が高い単語が位置する。したがってこの領域には、各教科書の特徴語が出現すると考えられる。

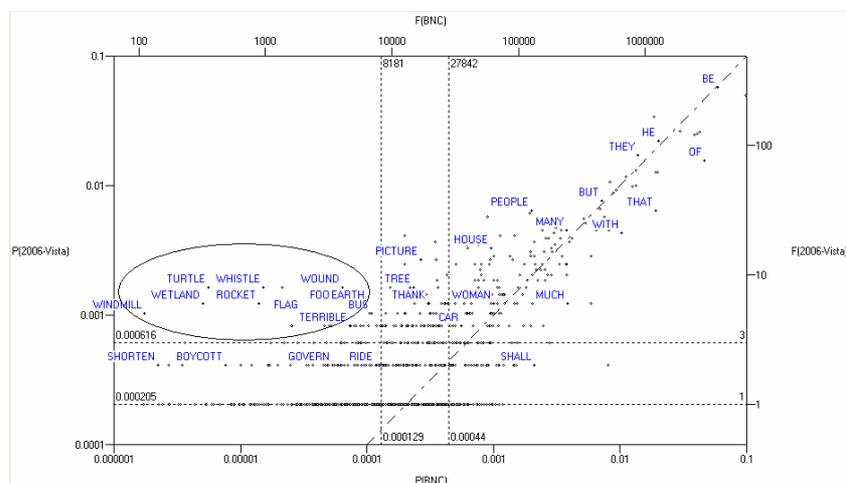


図1 2006年度 *Vista* シリーズの単語散布図

両年代共通8シリーズの単語散布図の左上の領域に属する語からそれぞれの年代の各教科書シリーズの特徴語リストを得て、各リストの特徴語の頻度上位10語ずつをABC順に並べて表6に示した。1988年度の特徴語上位10語のうち、同じ年度内の教科書語彙の2シリーズ以上に共通して現れた語(網掛けで示した)は、bicycle, duck, moon, ocean, pig, planet, potato, robotの8語であり、そのうちrobot

は4シリーズに出現した。2006年度では climber, nest, rocket の3語が2シリーズ共通の特徴語であった。各教科書の特徴語における共通語の数から, 1988年度は似たトピックが多く現れ, 2006年度はその傾向は弱まったのではないかと推察される。

表6 1988年度と2006年度の8シリーズの高等学校英語教科書語彙の特徴語

教科書レベル	基礎		中級	上級				
	Vista	English Now	Daily	Sunshine	Mainstream	Milestone	Crown	Unicorn
1988	beauty	bicycle	bicycle	arrow	automobile	button	camel	aesthetic
	bomb	duck	chase	brand	desert*	cousin	dinosaur	duck
	earth	hatch	monkey	calendar	gesture	earthquake	eruption	flag
	immigrant	kiss	movie	goose	jewel	genetic*	mathematics	lighthouse
	mountain	orange	pearl	moon*	poet	humor	moon*	ocean
	native	potato	planet*	ocean	poetry	insect*	nursery	planet*
	ox	spider	rob	pig	rhythm	pig	painter	raft
	pollute*	superstition	robot*	robot*	robot*	potato	rhyme	shelter
	sing	web	van	swan	stupid	robot*	scholar	solar
	whistle	wild	vegetable	whale	translate	salmon	wagon	waltz
2006	earth*	bean	cloth	birthday	gravity*	handkerchief	architect	balloon
	flag	chocolate	duck	climber	insect	heartbeat	baseball	berry
	football	climber	fox	clothing	jewel	laughter	broom*	buggy
	grandmother	doll	luncheon	diary	punishment*	microwave	cartoon	chef
	rocket*	fisherman	nest	diver	shelter	nest	creative	cuisine
	turtle	genetically*	peach	ink*	short-term*	organ*	imagination	herb
	wetland	recycle*	pillow	lamb	translate	pepper	invention	kite
	whistle	scientist*	potato	listener	translation	pet	movie	lion
	windmill*	wheelchair*	rocket*	treasure	visa	photo	planet*	parrot
	wound	yellow	waiter	wizard*	volunteer*	tomato	puzzle	statue

表6を一瞥すると,たとえば表中の\*印を付けた特徴語からは,1988年度には,ロボット(robot)や宇宙関連(moon, planet)が複数の教科書で取り上げられたことや,genetic(遺伝子),desert(砂漠化),insect(農薬 DDT),pollute(公害)等の科学技術や環境問題がトピックとして取り上げられたことがわかる。2006年度には共通語は少なく,特徴語に表れたトピックは1988年度より多様化したように見える。たとえば,科学技術関連では,宇宙(rocket,gravity,scientist,earth,planet),遺伝子(genetically),脳(short-term[memory]),そして,リサイクル(recycle)やエネルギー関連(windmill)等の環境問題,社会関連ではボランティア(volunteer),車椅子(wheelchair),死刑制度([capital]punishment),臓器提供(organ[donation])があり,また,人気映画のHarry Potter(broom,ink,wizard)等の多彩なトピックが見えてくる。1970年代に教科書語彙を含むさまざまな言語資料の語彙を客観的に分析した竹蓋(1981)によると,教育用言語資料である教科書語彙は,「多様な

材料を混ぜ合わせるという言語教育用教材の宿命的特徴」として、「どの言語行為にもある程度似ているという傾向の出現頻度がある」(竹蓋, 1981:194)ということである。したがって、教科書語彙は「めずらしい語は多くないと言えることになる」(同: 196)。このような指摘を承知しつつ、本研究は教科書語彙を特徴付ける語を抽出しようと試みた。その結果、年代によって教科書に現れる特徴語には変化が見られるということが推察された。

### 3.5 実用性の変化

上で、2000年代の教科書語彙に表れた変化として、語彙数の減少、語彙の難易度の上昇、語彙の種類の多様化という傾向を見てきた。折しも、2003年に文部科学省は「英語が使える日本人」の育成という目標を掲げた。<sup>11</sup>この国家的目標に対して我が国の英語教科書は、どのような変化を遂げたのか。本節では、サンプルとして収集した言語活動の使用語彙に対する両年代共通8シリーズの教科書語彙のカバー率の変動という観点から、1980年代と2000年代の教科書語彙の実用性の変化を調査した。

個々の学習者が実際に学校教育で学習する「英語教科書語彙」には、高校教科書だけでなく中学教科書も含める必要がある。本研究では、採択率の高い(多くの学習者が会う可能性の高い)中学教科書(*New Horizon 1,2,3*)の語彙を、8シリーズの高校教科書に加えた。次に、中・高英語教科書の語彙を有すれば、現代のグローバル化社会に必要と考えられる言語活動で用いられる語彙(延べ語数)の何%の語が既習になるかというカバー率を、シリーズごとに求めた。紙幅の関係で8シリーズすべての結果を掲載することはできないため、表7には、教科書レベル(基礎・中級・上級)ごとに平均を求めた結果を年度ごとに示した。上の段から、高校教科書レベルと対象シリーズ数、年度、中・高英語教科書の合計異語数、そして合計異語数の増減量(2006年度 - 1988年度)である。続いて、7種の音声言語活動と文字言語活動のサンプルで使用された語彙に対する各教科書シリーズのカバー率、その平均値と両年代での増減量の結果を示した。最右欄には8シリーズの平均値を示した。

まず、右端にある8シリーズの平均値から見ていく。2006年度は1988年度に対して全体的に異語数が減少し(8シリーズ平均で179語減少)、それを反映してか、

カバー率は下がっている。音声言語活動に使用された語彙に対する中・高教科書語彙のカバー率は、1988年度から2006年度にかけて8シリーズ平均で90.4%から89.0%へと1.4%の減少である。文字言語活動に使用された語彙に対する中・高教科書語彙のカバー率も、8シリーズ平均で83.0%から81.8%へと1.2%減少した。

次に教科書レベル別に見てみると、基礎、中級、上級という教科書レベルの順に教科書の異語数は増加し、同様にカバー率も高くなっている。異語数の増減を見ると、基礎・中級レベルはそれぞれ218語、340語の減少であり、上級は131語の減少である。カバー率は、音声言語活動では、基礎・中級・上級レベルの順に、それぞれ2.6%、1.7%、0.7%の減少であり、文字言語活動ではそれぞれ1.7%、2.1%、0.7%ずつ減少している。基礎・中級レベルのカバー率の減少量は上級レベルより大きくなっており、教科書レベルの上級と基礎・中級との間の格差が拡大している傾向が示された。

表7 8シリーズの高等学校英語教科書語彙の年代別カバー率の変化

高校教科書レベルと対象シリーズ数		基礎(2シリーズ)		中級(1シリーズ)		上級(5シリーズ)		8シリーズ平均	
年度		1988	2006	1988	2006	1988	2006	1988	2006
中学+高校教科書の異語数		1,416語	1,198語	2,303語	1,963語	2,868語	2,737語	2,434語	2,255語
増減(2006年-1988年)		-218語		-340語		-131語		-179語	
音声言語活動	TOEICリスニング	85.7%	83.5%	89.6%	88.5%	91.7%	91.0%	90.0%	88.8%
	TOEFLリスニング	87.4%	85.1%	90.8%	89.8%	92.8%	92.0%	91.2%	90.0%
	大学チュートリアル	86.2%	84.2%	90.3%	88.7%	92.4%	91.8%	90.6%	89.5%
	PBSニュース	81.6%	78.9%	84.8%	82.8%	88.3%	88.0%	86.2%	85.1%
	VOA(ラジオレポート)	79.9%	75.7%	85.8%	82.4%	89.8%	89.9%	86.8%	85.4%
	サバイバル英会話	94.4%	91.6%	96.0%	94.7%	96.6%	95.5%	96.0%	94.4%
	映画(Titanic)	88.4%	86.2%	91.7%	90.2%	93.1%	91.7%	91.7%	90.1%
	カバー率平均	86.2%	83.6%	89.8%	88.1%	92.1%	91.4%	90.4%	89.0%
	増減(2006年-1988年)	-2.6%		-1.7%		-0.7%		-1.4%	
文字言語活動	TOEICリーディング	76.0%	74.7%	78.1%	75.2%	81.9%	81.6%	80.0%	79.1%
	TOEFLリーディング	79.4%	76.6%	79.7%	77.5%	84.4%	82.9%	82.6%	80.6%
	大学入学案内	77.4%	76.2%	77.4%	75.5%	83.4%	83.6%	81.2%	80.7%
	TIME(英文雑誌)	76.5%	75.6%	77.2%	76.6%	81.4%	80.7%	79.6%	78.9%
	News for You(ESL英字新聞)	85.2%	83.1%	86.9%	84.1%	89.8%	88.3%	88.3%	86.4%
	生活案内	74.8%	73.8%	75.9%	74.2%	80.3%	80.4%	78.4%	78.0%
	小説(Harry Potter)	88.6%	86.2%	91.1%	88.5%	91.9%	90.2%	91.0%	89.0%
	カバー率平均	79.7%	78.0%	80.9%	78.8%	84.7%	84.0%	83.0%	81.8%
	増減(2006年-1988年)	-1.7%		-2.1%		-0.7%		-1.2%	

上級5シリーズについて見ると、2006年度には平均カバー率は減少しているものの、一部のシリーズでカバー率が上昇しているものがあつたため、音声言語活動の中の「VOA」、文字言語活動の「大学入学案内」と「生活案内」の3種の平均カ

カバー率はわずかながら上昇している。本研究は個々の教科書シリーズの実用性の高低を求めるものではないのでシリーズ名への言及は避けるが、シリーズによっては2006年度に異語数を増やし、現代生活に必要な語彙を強化することによってカバー率を上昇させた教科書があった。一方、同じく2006年度に異語数を増やしたにも関わらず、カバー率が下がったシリーズもあった。このことから、単に異語数を増やせばカバー率が上昇するものではないという、語彙選定の難しさも示されたことを記しておきたい。

語彙研究の分野では英文の内容を理解するためには、当該英文の95%以上にあたる語彙数が最低限必要であろうという考え方をしている研究者が多いため、本稿では「95%カバー率」を実用性の目安とした。その結果、2006年度は上級レベルの教科書における「サバイバル英会話」のカバー率が95%を超えているだけである。また、英語としかない基礎レベルの教科書では、1980年代には「サバイバル英会話」において95%に手が届きそうであったが、2000年代ではその可能性は小さくなっている。中級用の教科書では、1980年代は「サバイバル英会話」で95%を超えていたが、2000年代では95%以下となった。このように95%に満たないカバー率では、自由なコミュニケーションは期待できないと考えられる。

上で、日本人学習者が中・高英語教科書から学べる語彙は、実用的な言語活動に対して不足していることを観察した。これらの結果を踏まえると、次のような対応を提言することができると考える。大学英語教育という厳しく制限された教育機会のなかで学習者の語彙力を向上させるには、まず、将来、学習者にとって、どのような分野やトピックでの言語活動が必要になるのかを熟考し、ニーズに合致した分野の語彙を十分に含む英語教材を使用する。そして、中・高英語教科書語彙の不足分を明らかにした上でそれらを補い、大学卒業時には目標言語活動における英語語彙カバー率を95%レベルに到達させるようなカリキュラム設計が望まれる。たとえば、上級レベルの高校教科書を終えた学習者では、カバー率をさらに5ポイント上積みさせる語彙増強を行えば *Harry Potter* を原文で読める可能性が見えている。また、仮に、大学生やビジネスマンのニーズが高い TOEIC で測られる英語コミュニケーション能力養成を目指すのであれば、TOEIC リスニングセクションについては4ポイント、リーディングセクションについては14ポイントの上積みを可能とする語彙力増強が必要である。実際に、TOEIC に頻出する日常語彙やビジネス

語彙を収集，精選して，一般教養の英語教材と併用して指導すれば，4年間の大学英語教育において95%のカバー率を達成する指導が可能なが報告されている(中條，2003: 中條他，2004)。

本節では，中・高英語教科書語彙の学習結果として到達される実用性を語彙のカバー率から推定した。本来，「実用性」に影響を与えるものには，語彙以外にも文法知識や背景知識等多くの要因がある。また，今回の実用性の調査結果は各7種の音声・文字言語活動のサンプルに限られるものである。それらを勘案しても，「英語が使える日本人の育成」という国家的目標の掲揚と，「ゆとり教育」は相容れないことが語彙の面から見えてくるのである。

#### 4. まとめ

本研究では，ゆとり教育における学習者の学力低下が指摘される今日，学習内容が大幅に削減された現行(平成11年告示)の学習指導要領に基づく2000年代の高校用英語教科書の語彙について，ゆとり教育がスタートしたばかりの20年前(昭和53年告示)の学習指導要領に基づく1980年代の高校用英語教科書語彙と比較した場合，どのような変化が見られるかを複数の視点から分析した。1980年代と2000年代の高校用教科書をほぼ網羅的にコーパス化し，教科書シリーズごとに調査した結果，次のことが明らかとなった。

- (1) 語彙数の変化：異語数，延べ語数は1980年代から2000年代へと減少した。異語数の減少は語彙力の低下へとつながり，延べ語数の減少による1語あたりの反復回数の減少は語彙の定着度が低下する要因になると考えられる。
- (2) 語彙レベルの変化：1980年代に比べ2000年代の方が語彙レベルは相対的に上昇し，比較的難易度の高い語彙が採用されていることが推察できる。
- (3) レンジの変化：2000年代に比べて1980年代の方がシリーズ間に重複語が多く，1980年代の教科書は互いに似た語が使用されていた傾向が強いと考えられる。
- (4) 特徴語の変化：1980年代では各教科書の特徴語に共通したものが多く，類似したトピックが多く扱われていたと考えられる。一方，2000年代は1980年代より特徴語が多彩で，広範囲なトピックが扱われているらしい傾向が見られた。
- (5) 実用性の変化：両年代を通じて，学校英語教科書語彙の実用性は，1分野(サバイバル英会話)を除いて，調査したほぼすべての言語活動において十分とは

言えなかった。2000年代は1980年代よりも全般に実用性は下がった。

学習者の語彙習得に関する学習歴を知ることは効果的な英語教育を実践する上で必要不可欠な要素と考えられる。現在、中等教育における英語教育用教材の中核を担うのは中学校用教科書、高等学校用教科書である。大学では、現行の「ゆとり教育」の影響に加え、18歳人口の減少に伴う「大学全入時代」を迎えて学力低下の問題が深刻化している。そのような現状への対応策として、シラバスの作成、指導法の改善、教科書選定の基礎資料として、本研究で実施した時代的变化に関する網羅的な英語教科書語彙の調査結果が参考になると考える。

謝辞 本研究は、平成19～20年度科学研究費補助金・基盤研究(C)課題番号19520480の援助を受けて行われました。本稿の執筆に際し、査読委員の方々より有益なコメントをいただきました。

\* 本稿の内容の一部は、「大学英語教育学会第46回全国大会」(於 安田女子大学, 9/7/2007)の口頭発表において報告したものです。

## 注

1. 学習指導要領は告示された後、実際に教科書となって実施されるのは数年後である。現行の学習指導要領は、中学校は平成10年(1998)に、高等学校は平成11年(1999)に告示された後、実施されたのはそれぞれ平成14・15年(2002・2003)である。学習指導要領の告示年度は、中学校と高等学校がそれぞれ同じである場合と異なる場合がある。本稿で、学習指導要領に関する年度を併記している場合は、左側が中学校、右側が高等学校である。
2. 中学校英語教科書の語彙調査は古くから行われてきた。菅沼(1937)や速川(1965)等の初期の研究では手作業による調査が行われたが、70年代以降は、垣田他(1977)、小川(1977)、小川(2001)、塩見(2002)、瀬谷(2004)、西垣・中條・武内(2006)、中村(2006)の研究のように、コンピュータを利用して分析が行われ、教科書に出現する語彙の頻度と分布が統計的に明らかにされた。高校英語教科書の語彙調査には、上述の速川(1965)をはじめ、淀縄(1983)、三浦(1987)、中條・長谷川・竹蓋(1993)、杉浦(2002)、小篠・江利川(2004)、長谷川・中條(2004)、山添(2006)等の研究がある。初期の研究の主な目的は教科書の出現語彙を統計的に明らかにすることであった。最近ではコンピュータ

- の利用によって通時的な教科書語彙どうしの比較(小篠・江利川, 2004; 長谷川・中條, 2004; 中條他, 2007), 教科書語彙と他ジャンルの英文テキスト語彙との比較(中條・長谷川・竹蓋, 1993; 長谷川・中條, 2004; 長谷川・中條・西垣, 2006)等, 多様な比較が行われるようになっている。高校教科書が中学校教科書と異なる点としては, 教科書の種類が多いこと, 教科書によって大きさ, ページ数, 英文の難易度等が大きく異なることが報告されている。
3. 2006年度は, 高等学校の英語に関する科目として, 英語, 英語, リーディング, オーラル・コミュニケーション, ライティングの6つの科目がある。学習指導要領には語彙に関して, オーラル・コミュニケーションで使用する語はそれぞれ英語の範囲内, また, ライティングは英語の範囲内と示されている(文部省, 1999)。したがって, 英語, , リーディングの教科書に出現する語彙を分析すれば, 他の3科目の教科書の語彙も網羅されると考えられる。1988年度も同様の理由で, 英語・・Bの教科書に出現する語彙が分析された。
  4. 1980年代の教科書100冊のうち11冊は1989年度使用の教科書目録に含まれている(文部省, 1988)。100冊を教科書シリーズごとにまとめる際, たとえば, *READ ENGLISH B*のように英語や英語は存在しなくて, 英語Bの教科書のみが出版されている場合は, 英語Bのみを1シリーズとした。1980年代の教科書40シリーズのうち, 英語・から成るものは18シリーズ, 英語・・Bは20シリーズ, 英語Bのみは2シリーズであった。
  5. 2000年代の教科書をシリーズごとにまとめる際, *Sunshine* シリーズは・・Reading・Advanced Readingのように, リーディングの教科書が2冊発行されており, シリーズ合計は4冊になった。この場合, *Sunshine Advanced Reading* は*Sunshine* シリーズに含めたが, シリーズごとの語彙比較に際しては, シリーズ合計として・・Readingの3冊を用いた。2000年代の教科書35シリーズのうち, 英語・から成るものは11シリーズ, 英語・・Readingは23シリーズ, Readingのみは1シリーズであった。
  6. 両資料とも調査年代が古く, 理想的な資料とは言えないかもしれない。そこで, BNC リストを用いた語彙レベルの計測結果と合わせて, 2つの異なる観点から1980年代と2000年代の教科書語彙の語彙レベルの変化を観察した。
  7. 「異語」は, 「ある言語資料中で使用されている異なる語」と定義する。「異語数」は異語の数であり, 出現回数は考慮しないで各語を1語と数えた合計語数である。「延べ語数」は, 「ある言語資料中で使用されている語の総計」であり, 異語数だけでなく, その反復使用されたものの数も加算したものである。

8. 中條(1991: 2-7)では, 現代社会の特徴分析から判明した学習者のニーズを反映し, 学習者が希望する, または目標とするであろうという基準に基づく23種類の言語活動を選定した。本稿では23種類の言語活動を再検討し, 現代のグローバル化社会と呼ばれる社会の中で生きるために必要とされる言語活動を14種類に厳選するとともに, 2000年代の言語資料に改訂したものを使用した。
9. 1980年代の教科書すべてと, 2000年代の約半数の教科書データは, スキャナーを使用して入力した。2000年代の約半数の教科書データは教科書出版社作成の電子データを利用した。本稿の語彙表が基づく単語の基底形(base form)の定義は齊藤他(1998: 112)に準ずる。語彙表の作成, 比較には, 中條・内山「語彙分析入門: lemma リストの作成」第26回英語コーパス学会ワークショップ(10/22/2005)にて使用された ruby プログラム等を利用した。
10. カバー率(text coverage)とは, ある語または語の集合が, テキスト全体の延べ語数の何パーセントを占めるかという指標である。カバー率(%) = (ある高校教科書の語彙表でカバーする目標言語資料の延べ語数) ÷ (目標言語資料の延べ語数) × 100
11. 英語が使える日本人の育成のための行動計画  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/15/03/030318a.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/03/030318a.htm).

## 参考文献

- 中條清美(1991)「英語教育基本語彙の選定に関する研究」千葉大学自然科学研究科学学位論文.
- 中條清美・長谷川修治・竹蓋幸生(1993)「日米英語教科書の比較研究から」『現代英語教育』29, 12: 14-16.
- 中條清美(2003)「英語初級者向け『TOEIC 語彙 1,2』の選定と効果」『日本大学生産工学部研究報告』36: 27-42.
- Chujo, K. (2004) "Measuring Vocabulary Levels of English Textbooks and Tests Using a BNC Lemmatised High Frequency Word List." In J. Nakamura, N. Inoue, & T. Tomoji (eds.) *English Corpora under Japanese Eyes*. Amsterdam: Rodopi, pp.231-249.
- 中條清美・牛田貴啓・山崎淳史・M. ジナング・内堀朝子・西垣知佳子(2004)「ビジュアルベシックによる TOEIC 用語彙力養成ソフトウェアの試作」, 『日本大学生産工学部研究報告』37: 29-43.
- Chujo, K. & M. Utiyama (2005) "Understanding the Role of Text Length, Sample Size and Vocabulary Size in Determining Text Coverage." *Reading in a Foreign Language*, 17, 1: 1-22. <http://nflrc.hawaii.edu/rfl/>.
- 中條清美・西垣知佳子・吉森智大・西岡菜穂子(2007)「小, 中, 高一貫型英語語彙シラバス開発のための基礎研究」『*Language Education & Technology*』44: 23-42.
- Dale, E. & J. O'Rourke (1981) *The Living Word Vocabulary*. Chicago: World Book-Childcraft

- International, Inc.
- Harris, A. J. & M. D. Jacobson (1972) *Basic Elementary Reading Vocabularies*. New York: The Macmillan Company.
- 長谷川修治・中條清美(2004)「学習指導要領の改訂に伴う学校英語教科書語彙の時代的变化: 1980年代から現在まで」『*Language Education & Technology*』41: 141-155.
- 長谷川修治・中條清美・西垣知佳子(2006)「大学入試英語問題語彙の難易度と有用性の時代的变化」『*JALT Journal*』28, 2: 115-134.
- 速川浩(1965)「教科書に現われた英語単語の研究」『*英語教育*』14, 1-4.
- 伊村元道(2003)『日本の英語教育200年』東京:大修館書店.
- 時事通信社(2005)「<調査>2005年度高校教科書採択状況:文科省まとめ(下)」『*内外教育*』5537: 8-15.
- 垣田直巳・三浦省五・友枝謙二・河田孝義(1977)『電子計算機による英語教科書の使用語彙総覧:中学校編』広島:溪水社.
- 荻谷剛彦(2003)『なぜ教育論争は不毛なのか - 学力論争を超えて』東京:中央公論新社.
- 笠島準一・浅野博他(2002) *New Horizon English Course 1, 2, 3*. 東京:東京書籍.
- Laufer, B. (1997) "The Lexical Plight in Second Language Reading: Words You Don't Know, Words You Think You Know, and Words You Can't Guess." In J. Coady, & T. Huckin (eds.), *Second Language Acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 20-34.
- Nation, I. S. P. (2001) *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- O'Dell, F. (1997) "Incorporating Vocabulary into the Syllabus." In N. Shumitt & M. McCarthy (eds.), *Vocabulary: Description, Acquisition and Pedagogy*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 258-278.
- 三浦省五(1987)『英語教科書使用語彙:文部省検定済高等学校用 英語 I・英語 II・英語 IIB』広島:溪水社.
- 文部省(1987)『高等学校用教科書目録(昭和63年度使用)』東京:文部省.
- 文部省(1988)『高等学校用教科書目録(昭和64年度使用)』東京:文部省.
- 文部省(1999)『高等学校学習指導要領』東京:大蔵省印刷局.
- 文部科学省(2006) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/kyoukasho/mokuroku/17/koutou/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/mokuroku/17/koutou/index.htm).
- 中村純作(2006)「教科書コーパスから何が見えるか:方法論と中学校英語教科書の場合」『立命館言語文化研究』17, 4: 143-166.
- 西垣知佳子・中條清美・武内仁(2006)「小学校英語との連携に配慮した中学校重要語彙学習のため e-learning 教材の開発」『千葉大学教育学部研究紀要』54: 235-246.
- 小川清(1977)『昭和53年度用中学校英語教科書使用語の初出ページ総合索引(コンピュータによる)』静岡県教育委員会学校教育課.
- 小川清(2001)「中学校英語教科書のコンコーダンスと使用語彙の頻度調査」『常葉学園大学研究紀要(外国語学部)』17: 1-30.
- 太田朗・伊藤健三・日下部徳次(1986) *New Horizon English Course 1, 2, 3*. 東京:東京書籍.
- 小篠敏明・江利川春雄(2004)『英語教科書の歴史的研究』東京:辞游社.
- 齊藤俊雄・中村純作・赤野一郎(1998)『英語コーパス言語学 - 基礎と実践』東京:研究社出版.

- 佐藤学(2001)『学力を問い直す - 学びのカリキュラムへ - 』東京:岩波書店.
- 瀬谷廣一(2004)「平成14年度版中学校英語教科書 教科書別・学年別・品詞別 語彙分析統計」<http://www.eng.ritsumeit.ac.jp/seya/>.
- 塩見知之(2002)『文部省検定済中学校・高等学校教科書に現れた英語の語彙』東京:北星堂.
- 出版労連(1987)『教科書レポート No.31』東京:出版労連.
- 菅沼太一郎(1937)「英語の学習語い選定の問題に就て」『九州帝国大学法文学部英文学科十周年記念論文集』27-44.
- 杉浦千早(2002)「高校英語教科書語彙リストの作成と使用語彙の検討」『*Language Education & Technology*』39: 117-136.
- 竹蓋幸生(1981)『コンピューターの見た現代英語:ボキャブラリーの科学』東京:エデュカ.
- Utiyama, M. & K. Chujo (2007) "Linking Word Distribution to Technical Vocabulary." *Journal of the College of Industrial Technology, Nihon University*, 40 : 13-21.
- 山添孝夫(2006)「教科書コーパスから何が見えるか:高等学校英語教科書の場合」『立命館言語文化研究』17, 4: 167-189.
- 淀縄光洋(1983)『高校英語語彙の実態と学習語彙体系の在り方』東京都立教育研究所.

## 付録1 1988年度高等学校英語教科書40シリーズ(\*1989年度用)

1	THE NEW AGE ENGLISH 1, 2, READERS	(荒木一雄他, 研究社)
2	A BETTER GUIDE TO ENGLISH , , B	(安井稔他, 開拓社)
3	THE NEW CENTURY ENGLISH SERIES ,	(若林俊輔他, 三省堂)
4	CHUO ENGLISH STUDIES ,	(上山政義他, 中央図書)
5	COSMOS ENGLISH COURSE 1, 2*	(大浦暁生他, 三友社)
6	CREATIVE English Course , , Reading	(垣田直己他, 第一出版)
7	THE CROWN ENGLISH SERIES , , B	(平野敬一他, 三省堂)
8	NEW CURRENT in English , , Readers	(垣田直己他, 第一出版)
9	DAILY ENGLISH COURSE , , * , B	(高梨健吉他, 池田書店)
10	ENJOY ENGLISH , , B	(長谷川潔他, 教育出版)
11	FIRST ENGLISH SERIES , *	(中村敬他, 三省堂)
12	FRESH ENGLISH , (UNIT ONE, UNIT TWO)	(羽澄栄治他, 第一出版)
13	Go, English! ,	(今村茂男他, 東京書籍)
14	HELLO ENGLISH ,	(池永勝雅他, 学図)
15	HIGHROAD TO ENGLISH , , B	(岩元巖他, 三省堂)
16	NEW HORIZON English Course , ; NEW CRYSTAL English Readings B	(緒方勲他, 東京書籍)
17	THE INTERNATIONAL ENGLISH , , Reading	(清水貞助他, 開拓社)
18	NEW LIGHT ENGLISH , , B	(橋本宏他, 開隆堂)
19	LIVING ENGLISH , *	(大柳英二他, 一橋)
20	MAINSTREAM , , B	(安藤昭一他, 増進館)
21	MILESTONE English Course , , * , B*	(成田義光他, 啓林館)
22	My Way To English ,	(石井清他, 一橋)
23	ENGLISH NOW ,	(佐藤秀志他, 開隆堂)
24	Pioneer ENGLISH , *	(蛭川久康他, 開拓社)
25	PRACTICAL ENGLISH COURSE , , B	(高梨健吉他, 池田書店)
26	RACCOON ENGLISH READINGS B*	(小野寺健他, 筑摩)
27	The Rainbow English Course ,	(末永国明他, 文英堂)
28	READ ENGLISH B	(池永勝雅他, 学図)
29	NEW SCOPE English Course , ; NEW WAVE English Readings B	(伊藤健三: 小池生夫他, 東京書籍)
30	The Senior English One, Two, Readings B	(福田陸太郎他, 旺文社)
31	NEW STANDARD ENGLISH ,	(木原研三他, 一橋)
32	Sunrise English , , B	(小川芳雄他, 旺文社)
33	Sunshine English Course , , * , B*	(土屋澄男他, 開隆堂)
34	SENIOR SWAN English Course , , B	(芹沢栄他, 開拓社)
35	ENGLISH TODAY , *	(梶木隆一他, 教出)
36	SENIOR TOTAL ENGLISH ,	(中島文雄他, 秀出)
37	UNICORN ENGLISH COURSE , , B	(吉田正俊他, 文英堂)
38	VISTA ENGLISH SERIES , (Step One, Step Two)	(横川信義他, 三省堂)
39	WHY ENGLISH ,	(池永勝雅他, 学図)
40	NEW WINGS ,	(田中一郎他, 開隆堂)

## 付録2 2006年度高等学校英語教科書35シリーズ

1	ACORN English Course	(金田道和他, 啓林館)
2	All Aboard! English	(久村研他, 東京書籍)
3	Captain English Course	(米山朝二他, 大修館)
4	CROWN English Series	(霜崎實他, 三省堂)
5	DAILY ENGLISH COURSE	(高梨健吉他, 池田書店)
6	ENGLISH NOW	(石井丈夫他, 開隆堂)
7	EXCEED English Series	(森住衛他, 三省堂)
8	Genius English Course	(米山朝二他, 大修館)
9	Lingua-Land	(赤川祐他, 教育出版)
10	MAINSTREAM	(鈴木寿一他, 増進堂)
11	MILESTONE English Course	(島田守他, 啓林館)
12	NEW COSMOS English Course	(大浦暁生他, 三友社)
13	New English PAL	(和田稔他, 桐原書店)
14	NEW LEGEND ENGLISH	(鈴木英一他, 開拓社)
15	NEW STAGE English Course	(川辺俊一他, 池田書店)
16	NEW STREAM	(鈴木寿一他, 増進堂)
17	NEW WORLD English Course	(瀧口優他, 三友社)
18	ONE WORLD English Course	(國枝マリ他, 教育出版)
19	ORBIT English Reading	(高梨庸雄他, 三省堂)
20	Planet Blue English Course	(根岸雅史他, 旺文社)
21	POLESTAR English Course	(南出康世他, 数研出版)
22	Power On English	(神保尚武他, 東京書籍)
23	POWWOW English Course	(末永国明他, 文英堂)
24	PROMINENCE English	(中田清一他, 東京書籍)
25	PRO-VISION ENGLISH COURSE	(原口庄輔他, 桐原書店)
26	Step English	(花本金吾他, 旺文社)
27	SUNSHINE English Course	(追村純男他; 橋本浩他, 開隆堂)
28	Surfing English Course	(末永国明他, 文英堂)
29	Tomorrow English Course	(島田守他, 啓林館)
30	UNICORN ENGLISH COURSE	(市川泰男他, 文英堂)
31	Vista English Series	(池田智他, 三省堂)
32	Viva English!	(南村俊夫他, 第一学習社)
33	Vivid English Course	(南村俊夫他, 第一学習社)
34	Voyager English Course	(南村俊夫他, 第一学習社)
35	WORLD TREK ENGLISH COURSE	(浅羽亮一他, 桐原書店)

付録3 音声言語活動・文字言語活動各7種の言語資料

- (1) 英語コミュニケーション能力試験  
TOEIC公式ガイド & 問題集 Vol.1 (2000), Vol.2 (2002) 練習テスト  
TOEFL Practice Tests Vol.2 (1999) Practice Tests A, B
- (2) 大学留学  
大学チュートリアル (British National Corpus) 1st-year undergraduate tutorial: linguistics (G4W), Economics tutorial (HYL)  
大学入学案内 International Programs and Services (<http://www.columbia.edu/cu/isso/>)
- (3) 情報収集  
PBS (TVニュース) Inspecting Iraq 他 5編 (2002, [http://www.pbs.org/newshour/newshour\\_index.html](http://www.pbs.org/newshour/newshour_index.html))  
TIME (英文雑誌) A Bad Menu for Peace 他 16編 (2002, <http://www.time.com/time>)  
VOA (ラジオ・レポート) FAO Water Report 他 19編 (<http://www.eigozai.com/USA/USA.htm>)  
News for You (ESL英字新聞) Enron Under Investigation 等 5週分 (2002)
- (4) 日常生活  
サバイバル英語 (生活英語) eigozai ENGLISH USA (<http://www.eigozai.com/USA/USA.htm>)  
生活案内 Official web site of the City of White Plains (<http://www.cityofwhiteplains.com/>)
- (5) 趣味・教養  
映画 Titanic (<http://www.pumpkinsoft.de/screenplay451/>)  
小説 Harry Potter and the Philosopher's Stone, 1 ~ 5章 J. K. Rowling (1997)

中條清美	( 日本大学 chujo@cit.nihon-u.ac.jp )
西垣知佳子	( 千葉大学 gaki@faculty.chiba-u.jp )
長谷川修治	( 千葉県立茂原高等学校 shase@alto.ocn.ne.jp )
内山将夫	( 情報通信研究機構 mutiyama@nict.go.jp )